

今月の
テーマ : 戦争、政治、そして環境力

2026年4月 Vol.34 No.4



環境と文明

認定 NPO 法人 環境文明 21 会報



「見えない大切なこと」が崩れていく

田崎 智宏

何のことか。憤りを感じている人も多数いると思うが、米・イスラエルとイランの戦争（以下、「イラン戦争」という。）が引き起こしていることである。英国 BBC では、これを「戦争」と呼ぶが、日本のマスメディアはこれを「イラン攻撃」や「イラン侵攻」などと表現している。しかしながら、日本人らしい婉曲表現と賛美できそうにはない。見たくない現実から目を背ける方向へと誘うことになっていないか。「向き合う」ことの大切さを指摘しておきたい。

それにしても、トランプ大統領の言動は目に余る。米国議会の承認を得ずに他国への軍事作戦を行う違憲行為であり、また、米国戦争権限決議にも抵触している。当然ながら、主権国家への侵攻という武力行使は、国連憲章や国際法にも違反する。それでも、米・イスラエルの軍事行動を誰も止めることができていない。世界は、法やルールで愚かな行為を止めることができない事態に直面してしまっている。いずれ米国内でイラン戦争に至

る判断を吟味・評価し、必要な是正措置や裁定が行われることを期待するばかりである。

3月の朝日新聞の調査では、米国のイラン攻撃を支持しない人は82%、イラン攻撃が法的に問題かの考えを明らかにしない首相の姿勢を評価しない人が51%を占めた。国際秩序が崩れていくなか、大切なことは、法やルールに従わなくてよいという行為を既成事実化させないことであろう。さもなければ、国際秩序の回復は遠のくばかりである。世界の首脳で米国を批判した数少ない人としてスペインのサンチェス首相がいる。彼は3月4日のテレビ演説で「大きな戦争は、往々にして、誤算、技術的失敗、予期せぬ出来事が原因となり、制御不能になった連鎖反応によって引き起こされてきた。」と述べる。イラン戦争の早期終結はロシア・ウクライナ戦争とともに人々の悲願であるが、さらなる悪連鎖が生じることにはなんとしても食い止めていただきたい。

ところで私は、環境研究者として環境指標

の研究も行ってきた。指標で大切なことは、いかに物事の重要なポイントに焦点をあて、できるだけ分かりやすく見えるようにすることである。そのため、人々に「見える」ようにする大切さは人一倍認識しているつもりである。その一方で、指標では、どうしても見えにくい大切な事柄が存在することも知っている。ここまでに述べた「秩序」「風潮」「連鎖」、いずれも見えにくく、しかしながら、私たちの生活や幸せの基盤を大きく揺るがすものである。

足元の生活をみれば、「イラン戦争⇒ガソリン等の価格高騰」という状況である。しかしながら、実際は「イラン戦争⇒秩序の破壊⇒ガソリン等の価格高騰」と捉えるべきだろう。戦争は終わったとしても、「秩序」が回復しなければ、様々な悪影響に禍根を残す。日本を含め、ある国が侵攻されたときに、どの国も止めないことが当たり前になってしまう。地球環境問題については、国際協調が弱まり、世界の脱炭素政策や環境政策への結集力と実施力が弱まるといった副次的な影響も懸念される。目先の見えやすい物価だけでなく、それ以外の失われていく物事をなんとかして回復することが大切である。

今回のことで、改めて戦争の愚かさや戦争が環境・サステナビリティのうえで大きな問題であることを認識せざるを得なかった。数値として見えるようにするという観点から、戦争に関するデータや知見をいくつかお伝えしたい。

戦争が破壊するもの、失わせるものは何だろうか。人命、住まいや建物・インフラ、戦地における自然環境などが挙げられる。サステナビリティの指標では、それぞれ人的資本、人工資本、自然資本と呼ばれるものである。いくつかのサステナビリティの指標では、それらが過去よりも減らないことをもって、持

続可能であるかを判定する。しかしながら、戦争はこれらの資本を大きく損なう。例えば、90年代以降、湾岸戦争、ユーゴスラビア紛争、アフガン戦争、イラク戦争などいずれも13万～30万人規模で死者がでた。しかも、このうち民間人の死者が3割～9割を占める。また、戦争の負傷者は死者の数倍になることが多い。人工資本については、ロシア・ウクライナ戦争では最初の約1年でウクライナの住宅・インフラ等への直接的な損害が1,475億米ドルに達したとされる。ウクライナの2019～2020年のGDPが同程度の額であるから、戦争というものはいかに多くのものを破壊してしまうのか。戦争の間、通常的生活や経済活動が行えなくなるので、そのような間接的な被害額も加えると総被害額は上記額の4倍にもなる。地域の環境については、兵器使用による森林喪失や重金属等による土壌汚染・水汚染、爆発等による大気汚染などを引き起こし、戦争後も爪あとを残す。ラオスでは、いまだにベトナム戦争時の不発弾が8000万個も残っており、それらの撤去が国家の課題となっている（ラオスでは18番目のSDGsと位置づけ）。加えて、武力紛争を経験した国は環境パフォーマンス指標が有意に低く、紛争終了後も20～30年かけてようやく回復するという研究結果もある。また、地域環境だけでなく、地球温暖化も進行させる。ウクライナにおける4年間の戦争による温室効果ガス排出量は3.11億トンと推計されている。2024年の世界各国のランキングにこの量をあてはめると、世界19番目の排出となる。英国の年間排出量にも相当する大きさである。

このようにデータで見ても、戦争は、環境文明が大切にする基盤を破壊し、これまでの経済発展を後戻しし、かつ将来への発展の支障になる。人道面だけでなく、環境面からも即刻やめるべき愚かな行為である。